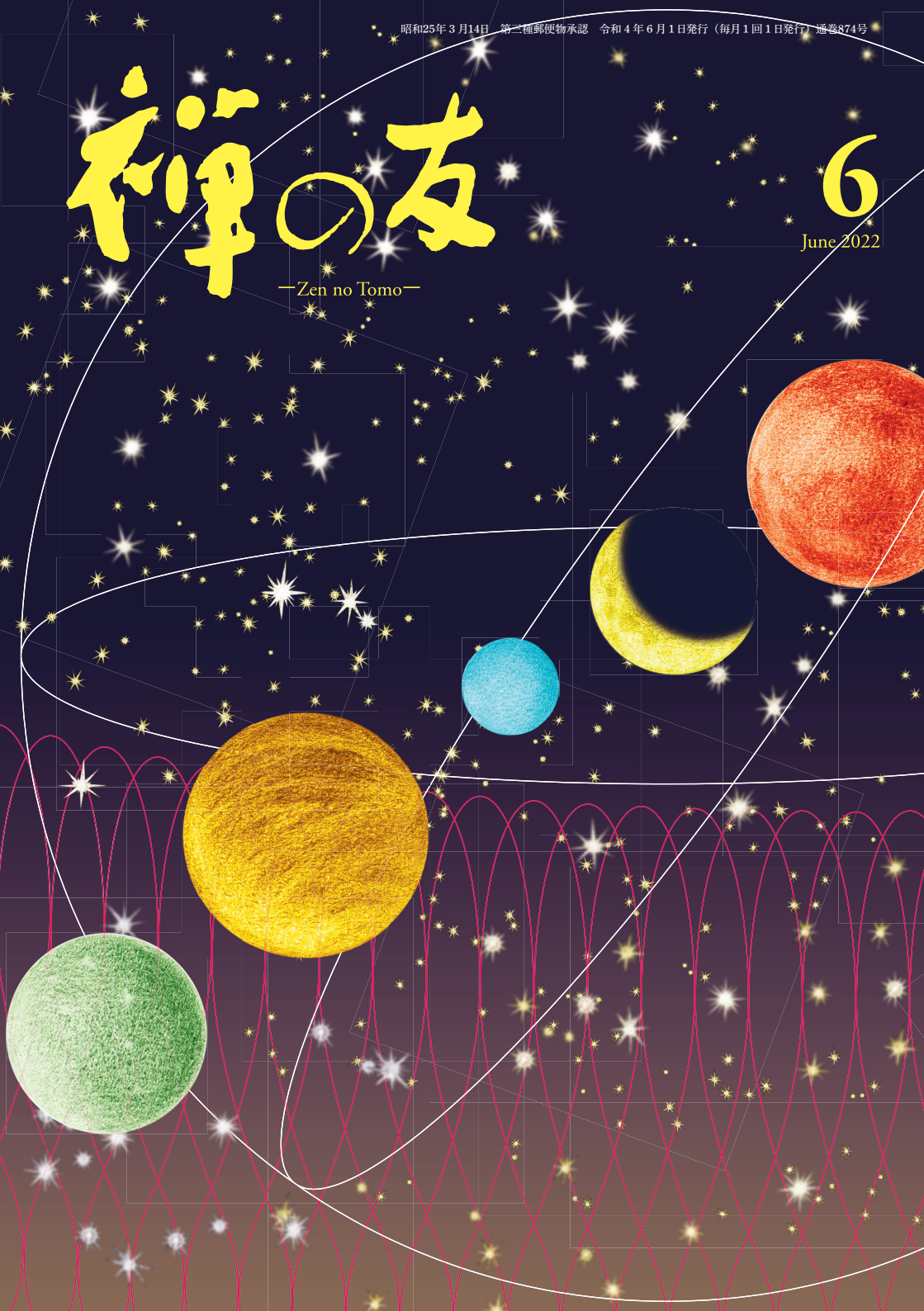


禅の友

—Zen no Tomo—

6
June 2022





ご本山だより 大本山永平寺【身心を調えて】

大本山永平寺
福井県吉田郡

☎〇七七六・六三・三一〇二



六月になり、梅雨を迎えた永平寺では、溪を流れる水音に加え、雨音も心地よく山内を荘厳しております。大自然による荘厳に加え、晴れた日には掃き作務、雨の日には窓ふき作務と修行僧が懸命に清掃作務することにより、その荘厳が一層尊いものとなっております。

二月中旬から三月下旬にかけて上山し、新たに永平寺での修行生活を始めた六十数名の新到雲水も、ようやく三カ月を過ぎ身心共に落ち着いてまいました。

永平寺での食事や生活は、多くの新到雲水にとってそれまでの食生活と大きく異なり、それに伴って身体も変化していきます。しかし、ゆっくりと時間をかけて食事と生活に慣れるこ

とで、永平寺へ来る前より体調が良くなったという雲水も少なくありません。

日々規則正しい食生活を修行することで、身体を調え、その上で正身端坐し呼吸を調えることにより、次第に心も調ってまいります。

道元禅師さまは『学道用心集』の中で「身心を調えて以て仏道に入るなり」とお示しです。

「修行」というと身体を痛めつけるような苦行を連想しがちですが、永平寺での「修行」は只ひたすらに身心を調え、毎日の仏道修行を勤めることに他なりません。

今日も永平寺の修行僧は、道元禅師さまのみ教えのもと、身心を調え仏道修行に精進しております。



ご本山だより 大本山總持寺

伝光会攝心

参禪学道、本より心を明らかに、
旨を悟るを以て、其の指要とす
『伝光録』第三十七祖雲巖無住大師章

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二一



新緑の清々しい好時節となりましたがコロナ感染症は一向に収まる気配はなく、私たちの心も荒みがちなっております。

只、今出来ることを行動に起こして前に進むしかないので。

六月になると總持寺のある鶴見区は南風が吹くとともに、梅雨と重なり高温多湿の何とも不快を感じる気候となります。

その中、六月六日から十日の五日間、伝光会攝心が行われます。

期間中は坐禪に徹するとともに『伝光録』を参究致します。

この攝心は昭和二十一年に独住第十七世・渡辺玄宗禪師が私財を投じて始められた行持なのです。

『伝光録』とは總持寺開祖・瑩山禪

師がお示しになられた宗典でお釈迦さまより徹通禪師（瑩山禪師のお師匠さま）までの五十二名のお祖師さまについてそれぞれ章を設けてその教え、足跡を紹介しております。

また瑩山禪師ご自身の見解も示されておりますこの宗典を参究し坐禪に励むのが伝光会攝心なのです。

副題の言葉は「禪の教えを学び、仏道を習うことは自己の心を明らかにし、自己を知ることである」とのお示しであります。

この自己究明こそが、この世で生かされている自己の存在を確認することであり、それがまた人々を濟度していくこうとする思いと向かっていくのです。

選・坊城俊樹

望月の下に眠れば花吹雪

千葉県 酒井 利夫

評「花吹雪」が主なる季題と思われる。望月の夜の夢幻なる中で寝ていると、外は荘厳な花吹雪に満たされていた。それは現実かはたまた夢か。しかしそんなことはどちらでもよいのだろう。この美しい物語のような句にとつてはその美意識こそが尊いから。

石佛の痩せて菜の花ざかりかな

大阪府 柏原 才子

評 なんともほのぼのとした風景。この石仏はかなり古く、何百年の風雪によつてすっかり痩せ細ってしまった。しかしそれを取り巻く春の大地の菜の花はそんな仏を優しく包む。仏教の心を持った俳句とはこういうものだろう。作者の優しい心が滲み出ている。

◆ 野地蔵の顔のゆるびし名草の芽 北海道 大野 節子

◆ 転読の風やはらかき涅槃寺 愛知県 紅林 廣子

◆ 雪に雪積みて孤立の只見町 福島県 大槻 弘

◆ 手放しに泣いて笑つて卒業す 岐阜県 大下 雅子

◆ 探梅や身にかなひたる杖持ちて 山口県 御江 恭子

◆ 献血車来て駅前の花の下 東京都 長谷川 瞳

◆ ひそひそと葉づれの音や臘月 鳥取県 徳本 義則

◆ 黙照に花の気配も及びをり 東京都 藤森 莊吉

◆ のびのびと空欲しいまま鳥帰る 東京都 松本 キ又

◆ 少年に道を尋ねる春の昼 宮城県 高橋 静子

選者吟

霞みたる幽霊坂へ迷ひたる 俊樹

作句小見 「幽霊坂」というのは各地にあるが、これは東京麻布になる坂。その日はまさに汪洋と霞んだ日であり、麻布界隈の土地は道が入り組んでいるのでいつしか迷ってしまった。そんな路地を歩くと、幽霊がひょっこりと出てきそうな不思議な感覚に囚われた。

選・長澤ちづ

門前に祈る平和と掲げれば目を潤ませる
青年の居り

埼玉県 丸山 劫外

評 この門は山門のことである。作者は吉祥院の住職。ロシアのウクライナ侵攻を悲しむ作者が、一日も早い終結を願い掲げた「祈る平和」であろう。下の句の「青年」はウクライナの青年かも知れない。多くを語らぬ処が良い。

所縁なき葬に合掌の老夫婦 列の過ぐれ
ば田草取りおり

秋田県 小田嶋 恭葉

評 田の草取りをする老夫婦の様子をすこし離れた処から眺めて丁寧に詠う。死者への敬虔な気持ちと農作業の変わらぬ営為が静かに醸し出す世界である。

◆ 春暁の茜に染むる巻網を緑る蜚唄は齶を躍らす
岩手県 関合新一

◆ 原発に続く道路に国民が楯となりみるウクライナの春
福島県 大槻 弘

◆ 的確に消火栓出す除雪車の遠のく町は道幅広し
秋田県 後藤榮子

◆ 春立ちて老女の遊びの針仕事縮緬布で小さな兔を
秋田県 小松 紀子

◆ 彼岸とてぼた餅作る家なしと餡練るわれのそばで娘の言う々
静岡県 杉原 民子

◆ 白金の如くに光る寺の屋根雲無き今宵の月は冴えつつ
鳥取県 徳本 義則

◆ 初めてのキューブゲームに挑む子の幼き手元によだれ一滴
三重県 藤川 幸子

◆ 画用紙の白き画面に描かれし南部鉄瓶影の凹凸
山口県 橋本 美知子

◆ 遠き日の潮汲み峠に見つけたる瓶の破片の悔しきかがやき
三重県 西村 廣視

◆ 老いたれば人皆やさしと子に言えば素直に生きてと電話の向こう
福島県 佐藤 忠

選者誌

死期ちかき母への愛が足りなくてぼつと紅梅

ぼつと白梅

ちづ

作歌小見 月の光を「白金の如く光る屋根」に捉えた徳本さん、幼子がゲームに熱中する愛らしさを「よだれ一滴」に表した藤川さん、素直な老人になればこそ「人皆やさし」なのだ暗示させる佐藤さんの歌など、秀歌の揃った今月でした。